

前回のM情報では現在の創傷治療の一般論を解説しました。昔言われていた“傷はしっかり消毒して乾かせ”は間違いだったということです。さて、人と牛とでは傷の原因も違えば治療へかける労力も金額も。そもそも牛はじっとしていないし、じっとしてもらわねにもいかない事情もあります(ただし、局面的には“絶対安静”によって治療に導ける場面もあります)。今回は症例を挙げての各論です。本には様々な症例が載っていますが、私の興味はコレ。どうぞご参考になさってください・・・

創傷治療の常識非常識 [消毒とガーゼ撲滅宣言] (三輪書店) 夏井睦より

創傷の治療 爪が抜けた症例 より

32歳女性。自宅で家具を第1趾に落とし、翌日受診した。受診時爪甲は完全に剥離していたため(写真1)、局所麻酔下に抜爪を行い(2)、アルギン酸塩(とても強力な止血効果を有するドレッシング材。滲出液などを吸収してゼリー状になるため、創傷面の湿潤環境を保つ)で被覆した(3)。翌日、アルギン酸塩を除去し、出血が完全に止まっていることを確認したうえで洗面器に水道水(微温湯)を入れ、患部を含め足全体を洗わせたが、疼痛はほとんどないため自宅での入浴も可とした(4)。その後の処置は、入浴をして患部を洗わせ、創面をポリウレタンフォームドレッシングで被覆させるのみとした。治療開始7日目で爪床は一部を除き上皮化し(5)、15日目で完全に上皮化、ドレッシングも不要となった(6)。なお、この患者は3日目から普通の靴を履いて生活できるようになり、8日目に地域のバレーボール大会に出場したが、痛みもなく普通にプレーできたということであった。

爪甲剥離は日常診療で治療する機会の多い外傷であり、同時に非常に疼痛が強いことでも知られている。通常の治療では歩行も困難であり、入浴も不可能で、スポーツなどは論外といったところであろう。しかし、この例に示すように抜爪直後から閉鎖療法(湿潤療法)を行うことでごく普通に歩けるようになり入浴もスポーツも可能である。またこれまでに同様の症例を数十例を治療しているが、ほぼ全例で翌日からの入浴が可能であった。

要するに、これまでの「抜爪の痛み」は間違った治療に起因する痛み、すなわち医療性疼痛であり、本来あってはならない痛みだったのである。



[1]



[2]



[3]



[4]



[5]



[6]